

らいいプラス

# 風景まるごと博物館

## 熊本・水俣市

熊本県水俣市を訪れると、かつての公舎の街と連った美しい風景に驚かされる。天草を臨む温泉地・湯の児など海岸線の美しさに加え、「日本の棚田百選」に選ばれた田園風景など中山間地にも魅力がある。こうした日本の原風景を「村丸ごと生活博物館」として新たな観光資源として打ち出している。

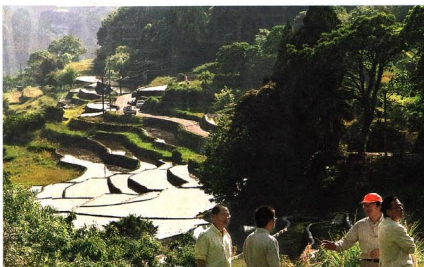
□ □

「あの大きな岩は土石流の跡といわれ、再発に備え近くには家を造りません」。久木野ふるさどセンター愛林館館長の沢畑亨さん(51)が指さす棚田には、巨岩が転がっている。百選に選ばれた寒川の棚田は眺めるだけでも美しい。だが「石ころだらけの地面の石を積み重ねたのが棚田の石垣」「中の石が揺れるを吸収するから地震にも強い」といった説明を聞くと、石垣そのものにも興味が湧いてくる。

愛林館は地元の人々の街の委託を受けて運営する村おこし施設。沢畑さんは全国公募で1994年に館長に就任した。ボランティアによる草刈り合宿や、棚田のカメラを輸入してもらう「食べた田舎手(たすけて)と食べた活動を次々と手掛ける」。

その一つが村丸ごと生活博物館だ。市が'2002年度に始めた制度で、田園風景や地産品の生活そのものを展示物にみわたる訪問者に紹介する。現在、久木野など4地区で地元の人や団体客を中心に有料で案内している。熊本県宇城市の末松道洋さん(50)は「我々の住む平野部と違う、山の生がよく分かる」と驚いていた。

東大で農学を修めた沢畑さんの説明は科学的で分かりやす



## 「なんもなか」逆手に

一方、久木野から車で約1時間の頭石(かぐめいし)地区では、頭石元気村代表の勝目豊さん(72)がぼくとつな語り口で中山間地の魅力を語る。

生活博物館の活動を始めた当初、住民は地元について「なんもなか(何もない)ところ」と自嘲気味だった。だが石名やノシシ捕り、家庭料理の名人などを生活職人として認定し、来訪者へ説明するうちに「当たり前と思っていた風景や生活の知恵も素晴らしいものだ」と意識が変わってきたと勝目さん。

今では年間200〜300人が訪れ、地元のみず水を使った「頭石サイダー」など特産品作りも始まった。活動を提唱したのは元水俣市職員で「地元学をはじめよ

う」(岩波書店)などの著書もある吉本哲郎さん(65)は「生活文化の素晴らしさも地元の人々が気付かせ、訪れる人もそれを感じてもらえれば」と語る。生活博物館の案内は事前予約が必要だ。

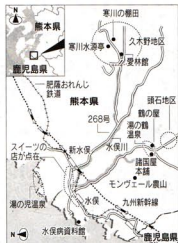
□

手軽に地域の魅力を感じるなら頭石に近い湯の鶴温泉の「鶴の窟」がある。小ぶりの物産館を併設したレストランで市が昨秋開業。九州新幹線などのデザインで知られる水戸岡鋭治氏が手掛けた内装と、地産食材を使った料理が人気となった。マネージャーの井出和也さん(35)は福岡市から赴任したが、「野菜やかんきつ類はもちろん、お茶

田園美術館「里見」の展示。久木野ふるさどセンター愛林館



地元である棚田と水俣林を観光資源に活用しよう



## ☆旅支度

新水俣駅までは九州新幹線で博多駅から最速1時間強。並走する肥前おれんじ鉄道の観光列車「おれんじ食堂」も魅力。駅からは「なんもなか」バスが1時間ほど走る。湯の児、湯の鶴温泉の観光客は温泉まで100円でタクシーを利用できる。

や牛乳も地元でそろそろ。地域の宝が豊富」と実感する。

近くでは、地元企業が古民家を改装した飲食店「諸国屋本舗」を開店し、ひびいた温泉地へ人が集まるようになった。同じ山の中でも、北海道のような広がりを感じるのがモンヴェール農山(のうまや)だ。26年前に開拓した42段の敷地に牧草地や豚舎、パーベキュー店が

市内には多くの和洋菓子店がある。夏に向けてかき氷や、そうめん流し(寒川水遊亭など)も注目。問い合わせは観光物産協会(☎0966・63・2079)、村丸ごと生活博物館については市農業振興係(☎0966・61・1634)へ。

## 観光特典やスイーツも

ある。経営者の長女は農山春香さん(24)は「子どものころは不便だと思うこともあったが、山も水も素晴らしいところ」と今では父親の右腕として働く。

敷地内の展望台からは遠く長崎県の雲仙や水俣の海も一望できる。山の恵みは海にも注ぐ。環境都市を目指す市は今、山から見えるもとの街。(地方部次長 浅山肇)